HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	多和田葉子研究 [全文の要約]
Author(s)	袁, 嘉孜
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15993号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92382
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Chia-Zu_Yuan_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：袁　　嘉　孜

学位論文題名

多和田葉子研究

本論文の観点と方法

本論文は、多和田葉子文学の文芸様式を、彼女の渡航体験との関わりについて追究するものである。多和田は、長年ドイツ在住でドイツ語、ドイツ文化全般の薫陶を受けた日独バイリンガル作家である。多和田の作品において、在独の日本人留学生や日独語の翻訳・通訳に従事するドイツ在住の日本人を主人公として設けられるものが多い。先行研究では、このような人物設定や物語内容に着目し、多和田の言語体験をもとに、彼女の越境性に関して、しばしば言葉や文化の垣根を越えようとする作品の傾向について多く検討されてきた。しかしながら、多和田の越境性は、登場人物や物語のみならず、テクストの構成においても見出される。

テクストの構成における越境性とは、外部からその他のテクストを導入しながら、新しいテクストを構成する手法を用いる傾向を指す。このような多和田の第二次的テクストは、常に日本のだけではなくドイツをはじめとする西洋、世界のあらゆる文学のテクストを視野に入れつつ、そのなかから一つ以上のテクストを借用して新たな物語が語られる傾向を示している。

また、多和田は『エクソフォニー　母語の外へ出る旅』（二〇〇三）の中で、「もっとも広い意味で、母語の外に出た状態一般を指す」、エクソフォニー（Exophony）という概念を提出した。また、外国人の作家が母語／母国語ではない言葉で書かれた文学作品を一括りにし、エクソフォン文学として解釈し直そうとした。結論から言えば、多和田文学は、ドイツ語と日本語との二つの系統に則った理解を基盤としつつ、主として翻訳の作業を経てテクストを言葉遊びによって構築し、あらゆる越境するものの物語に高い幻想性を与えることにより、エクソフォニーの概念を繰り返して実践する。その意味で、多和田の日本語のテクストは、母語・母国語で書かれた越境文学と言える。

本論文は、多和田独自の翻訳観、言語観に注目しつつ、ジェラール・ジュネットの『パランプセスト：第二次の文学』（一九九五）の第二次的文学の理論

を通して、多和田の第二次テクスト的作品を検討することによって、エクソフォン文学の射程を模索した。

本論文の内容

本論文は、おおむね一九八〇年代末から一九九〇年代までの多和田文学の第二次テクスト作品群を辿る構成になっている。

第Ⅰ部では、第二次テクストの枠組みの中で、多和田葉子の作家像の輪郭を描き出すことを目的として、「うろこもち」（初出 : *Das Bad*, 1989）、「文字移植」（初出）「アルファベットの傷口」、『文芸』三二巻四号、一九九三・一一）を取り上げた。第一章で「うろこもち」を取り上げ、必ずしも喜びを感じられない母語の外に出た状態を体現する「私」の変身譚を読み直した。「うろこもち」は、「蛇」から出発して、日本神話の人身御供の話、日本民話の異類婚姻譚の話と変身モチーフ、ギリシア神話のペルセウス・アンドロメダ型の物語を、「私」の変身譚とつなぎ合わせた。日独通訳の仕事に務める「私」を通して、多和田文学におけるエクソフォニーが語られている一方、東西を問わず、複数のテクストの文脈を横断するテクスト構成においても、多和田文学の越境性が見出されると論じた。第二章では、多和田葉子の第二次テクスト的様式として借用（to adopt）という概念を提出し、引用、転移、アダプテーションという複数のイペルテクスト的実践を通して構成される「文字移植」を通して、多和田の翻訳観を検討した。「文字移植」では、ドイツ語作家アンネ・ドゥーデンの作品「アルファベットの傷口」（*Der wunde Punkt des Alphabets*, 1998）の借用を通して、「わたし」の翻訳の成果が示される。第二章では、アンネ・ドゥーデンの作品の改作を、「わたし」を通して表現される訳文と比較しながら、多和田の文学作品の翻訳観について確認した。この作品においても、多和田文学のテクスト構成における越境性が見受けられる一方、必ずしも先行テクストのパロディやアダプテーションとは言い切れない借用（to adopt）の概念を提出して分析した。この二つの作品は、登場人物の皮膚に関する描写が散見される点において共通している。「うろこもち」では、母語・母国語も第二外国語もうまく操ることのできない状態が続くなかで皮膚が透明になる「私」が描かれる。「文字移植」では、翻訳過程でつまずく状態において、翻訳の比喩的表現として捉えられる石によって爪の隙に傷ができてしまう「わたし」が語られる。この両作で示した多和田文学のイペルテクスト性も、その身体性も、のちの作品において継承されていながら変貌していくのである。

第Ⅱ部では、「ペルソナ」、「犬婿入り」、「ゴットハルト鉄道」における言葉と身体の関係性を検討し、多和田文学の小説言語におけるメカニズムを究明した。まず第三章で、皮膚感覚の描写が顕著に取り込まれた「ペルソナ」を分析した。

移民小説では多く見られるアイデンティティの問題に応じて、その答えとして能面と役者の身体との関係において、越境的で複合的なアイデンティティの生成と認識にたどり着いた道子を分析した。道子は、各々の登場人物との関係の中で、とまどったりしていながら個人と集団との関係を見定めた。能面と自らの身体との関係において、自分を言い表す言葉を手に入れたというように描かれる。この作品において、能劇とはその芸術様式において交差し、能劇の作法を借用しながらアイデンティティの様相の新たな可能性を提示した。第四章では、口頭での情報伝播と、口頭での民話の伝承との原理の類似性を分析し、小説「犬婿入り」と複数の犬婿入り伝承との比較を行った。この章では、イペルテクスト的実践をもとに、団地という伝承先に注目し、身体的描写の導入によって異質性を失われてはならない多和田文学における物語論的志向を見出した。第五章では、アイデンティティの問題系から遠く離れて、スイスの鉄道の旅を通して、観光客として在独日本人の西洋への眼差しが描かれる「ゴットハルト鉄道」を論じた。この作品は最初ドイツ語で書かれた紀行文であったが、日本語化される際に、小説の体裁に変えられ、幻想性の高い言葉の表現が多く加えられている。ドイツ語の言語表現に寄せられて、身体的比喩表現が顕著に見られる。旅は本来身体的移動、地理的移動として、見る、触るという身体感覚と深く関係している。この作品において、蛇と林檎を軸に複数のテクストが導入されながら、数多くの身体的描写は、言説の国誕生物語、建国神話に近づける仕掛けとして機能すると考えられる。

第Ⅲ部では、エクソフォニー、言葉、身体、イペルテクスト的実践などの要素を、多和田文学とドイツ民話との関係において検討した。特に「ふたくちおとこ」は、テクスト構成において、民話「オイレンシュピーゲル」、戯曲「ティル」と深く絡み合っている。オイレンシュピーゲルの物語、その人物像を巧妙に借用した結果として、中世の民衆的祝祭の表象様式を介して、言葉のメカニズムを最大限に極めることに至ったのである。それに伴い、中世の民衆本の借用によって、多和田文学における身体性が新たな様相を見せたということを、第六章、第七章の分析で明らかにした。「ふえふきおとこ」は、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』に収録された「ハーメルンの子供達」に基づき、とりわけイペルテクスト的実践としての増幅の手法を用いて作り上げられたものである。第八章では、中世のグロテクス・リアリズム的原理を借りて言えば、「ふえふきおとこ」の身体的描写は、最終的に物語を変身と再生にさせる多和田文学における物語論的志向につながっていくと分析した。

以上のような第二次テクストの分析を通して、多和田文学におけるディスクールの形式的な側面が一段と際立つ。そのような形式的特徴は、ストーリー性の豊富で、言葉のイメージの無限連鎖過程によって意味が拡散し、多義的に解釈しうる物語が新たに生まれ変わることを裏打ちしているのである。その意味で、多

和田が提唱したエクソフォン文学は、言語表現の方法と構造の側面に重んじるカテゴリーであると考えられる。そのような多和田の文学作品は、エクソフォン文学の枠組みの中で、多彩な様相を提示しながら、移民文学、越境文学のテーゼを内包しているのである。